



略歴

- 1932年 7月23日東京府豊多摩郡戸塚町（現新宿区高田馬場）
で生まれる。父和田小次郎、母和田栄。
- 1939年 4月自由学園初等科に入学
- 1953年 3月同学園学部卒（31回生） エンデルレ書店、
タトル商会などに勤務
- 1961年 矢島敬二と結婚
- 2005年 7月16日没

運命共同体・「勝つまでは」

矢島（和田）伸子

私の手元に二冊の古ぼけた日記帳がある。夏の間に那須高原の林の中で拾った、かつては美しかった紅葉が今では幾分赤茶ばんで机の上に落ちた。丁度、敗戦以来三十年たった年の秋、高良さんと一度那須へいく話をしていた頃、私の部屋の本棚の上から出てきたものだ。私共は初等部一年の時以来、日記をつける習慣をもっており、幸い戦災をまぬがれた私はそっくり何十冊か日記帳をもっている。しかし、私にとっていまわしい太平洋戦争、更に私共学童を疎開にまで追い込んだ昭和十九年前後の日記は、それ迄の幼い日記、楽しかったことの羅列のような日記と決定的に異質な何かを鮮明に記している。十一、二才のとるに足りない、全く頼りにならない身と知りながら当時の「少国民」として「勝つためには……」と大人からたたき込まれた教えに必死で応えようと生きてきたように思う。

学童疎開という日本の歴史の中にいまだかつてなかった事態を、けなげに受けとめ「勝つまでは」と我が身にいい聞かせつつ、ただひたむきに堪えてきたように思う。それ故に、こらえきれないほどつらいこと、泣き出したほど淋しかったこと、悲しかったことは多々あったけれど不思議と日記に記されていない。子供心に淋しい、悲しいといった人間のもつ弱い面（あるいは非国民的といった）の感情をおさえ、たんたんと事実のみを記している。

今でも当時の友達と会うと話題になる食事につつまるさわぎ、夜ごと西那須駅から聞えてくるやりきれないほど長く、淋しく、そして暗いあの汽笛の音、あの汽車に乗りさえすれば、と幾度思ったことか。今でこそ電化されて聞けなくなったものの、つい何年か前あの音を地方にいつて聞いた時、ふうっと当時の胸をしめつけられる思いが蘇ってきた。そして秋の夜ながの虫の大合唱、それは決して賑やかなものではなく、せつなくわびしいものだった。時たま東京から見える友達の御両親、どんなに羨ましくまぶしくその友達が見えたことか。

比較的恵まれた家庭に育ってきた者の集団だったために、それまで十年余で体験したことのない暗い堪えなければならぬことに次々と直面し動転した。それぞれ満されぬままに内に秘め、極く単純な感情が重さなり合い、かえってそれ等は複雑に交叉し時として爆発し、時として妙な形となって互いに牽制し合っていた。十二才を頭に六畳の部屋に五、六人ずつの部屋が十三。それ等が常に朗かでない子であったはずがなく、無事平穩であった南沢にいた時には到底考えられない些細なことからもいさかいが起った。又、それまでおとなしい人と友達から見られた人が部屋の主導権を握ったり、頼りにされていたと思われていた人が、以外な面を見せて皆の信頼を失っていったりもした。

振り返って見るまでもなくそれ迄、私共は南沢で実のびのびと男女共学を楽しんでいた。私共の級が特にそうだったのかわからないけれど。ところが疎開して男女が食堂を中心に部屋がはっきり区分され、互いに友達をたずねることすら許されなかったことは無邪気な私共にとってなんとも納得し難いことだった。半年同じ屋根の下に住みながら男子の部屋がどんなものだったか全く知らない。覚えてるのは巾広の長い廊下程度で、ある人が男子の部屋へいったことで皆の前で非常に叱られたことぐらいだ。その時の先生の目の鋭く恐ろしかったこと。今になってどうしてあれほどに叱らなければならなかったのか理解出来ないことはないけれど。当時の私共は想像もつかないほど奥手だったので叱られた理由がわからぬままシヨックは大きかった。教師側からすれば、あの食料難の中でとに角、八十人近くの食料を確保することから始まり、こうした類の問題をかかえて神経の休まる暇もなかったのではないかと今になって思う。初等部の先生といえば阿部先生お一人であったこと、改めて考える迄もなく女子部高等科三年の初対面の先生方といえば十八才、後に交代してこられたのは十六才の先生だったかと思うと、そろそろ私共の子供が迎える年なのは今更驚く。

日々うつりかわる集団生活の目まぐるしさに加え、六年生として私共は受験を控え勉強にも励まなければならなかった。他方、食べるためには薪拾いから料理、後片付、野菜の運搬、豚の世話、更に一時間余りかかって男子部の農場の手伝いにも相当の時間を使った。それより何にも増して戦況が刻々悪化していく中で（子供ながらよくわかっていた）空襲があるたびに、自分達がなんの力にもなれないもどかしさを感じながら東京の我が家を心配したものだ。しかしこうした情況に自分達が堪えることによって現在とはとも角、いつか戦争に勝てるのだといった、いわば運命共同体の一端をになって生きていた。子供ながらにはなく純粹な子供だったからこそ信じて疑わなかった……と私は思う。しかし以上記してきたことは三十三年経た現在頭に焼き付いている事柄であって日記にはこのようなことは一際触れていない。その点多少不満はあるものの、当時の様々な状況を知る上で、今では貴重な日記の中から何日かを紹介しようと思う。

当時の（昭和十九年）末期的な戦況について記してあるので疎開より少しさかのぼって見る。

六月廿一日 火 曇後雨 私は玄閣掃除をする前に門をあける。たいがいの時新聞はきて居る。今日も来て居た。私は戦況の事が気になって新聞をひらいた。すると昨日の十六時四十五分に発表された戦果がのっていた。ずっと読んでいくと記事にはこんな事が書いてあった。「…大本営発表の如く戦艦以下撃沈廿二隻、敵機三百機以上を撃墜◇……しかし太平洋に集結せる敵海軍勢力に比すれば、今回の我が方の戦果がそのほんの一部に過ぎぬことは勿論であって……」ここ迄読んで大激戦がおこなわれて居ることがはっきりわかる。

敵は今必死になって来て居るのだ。そして大機動部隊を出動させマリアナ諸島に集中しているのだ。……

「私は戦争の始めのうちこそ大本営発表を信じ、その戦果に小踊りして喜こんだ。しかし余りの数の多さにそろそろ敵の軍艦や飛行機は底をつくのではないかと無邪気に考えた。しかし反面この余りに大げさな数はひよっとしてウソではないかとひっかかりを感じ新聞記事に注意して読むようになった。」

七月一四日 金 家では今「そかい」の話をして居るが私は断然いやだ。と言いはったが佐藤先生もおっしゃったように今は本当にいつ空襲があるかわからない時だから「そかい」はいやだと言ひ張るやうでは困るとおっしゃった。

七月十八日 火 晴れ 敵がサイパンに上陸して以来二十二日間我が守備部隊は全力をあげて戦って居た。が、ついに十六日十七時全員玉砕となった。アツツ、タラワ、マキニと重ね又ここにサイパンを失つていよいよ決戦となった。赤ちゃんから老人まで全部、敵と戦って血みどろとなって死んだのだ。もうサイパンは敵のものとなってしまった。やがて飛行場を作り本土にやってくるだろう……。

八月十九日 土 晴れ 朝日新聞を見て涙の出る思いがした。それはサイパンで戦死した兵隊さんと共に戦いつづけた在留邦人の事である。記事の一節に「……五十人の日本人が、それも小さい子供を加えた一団が丁度野球試合前の選手がウォーミング・アップをするようにききとして手榴弾を投げ合つて居るのを見て肝をつぶした……」と、のつて居る。私はこれを読んだ時、声も出ない程であった。そして本当に死ぬ覚悟で決戦をしなければならぬと思った。

「七月廿日から僅か一ヶ月の夏休みがあつた。初等部では立大のプールで水泳の練習があり、勉強は近所の七、八人の人で編成された班毎にし、大人の草履作りの手伝いに布を切る仕事もした。交代で南沢の草取り、豚当番にいく。防空壕の掃除は小学生の仕事だった。また疎開するための荷物の用意も始められた。やがて夏も終りに近づくとう方々で送別会が開かれた。終戦後の食料難のそれと比べ当時はまだ恵まれていたように思う。「……もう本当に子供は皆別れ別れ。楽しかったこの下落合もさびしくなっていくのを感じた……。」とある。当時、送別会を壮行会と書くのがはやってた。壮とは、血氣盛ん、男らしい、と辞典にある。軍部がない知恵をしぼって考え出したのであろうか。私はその勇ましい感じが別れにふさわしいと思はず送別会で通している。」

八月三十日 水 晴れ 「……四時五十分の電車で帰ろうと田無までくると遠藤さんが新聞を見ながら「パリ遂に陥落」と言うので、あゝと思った。駅に新聞売りの人がいたの

で私も買って読んだ。

「九月の始め山本さんのお母様が亡くなられ、初等部を代表して告別式に参列した。葬送行進曲を耳にし、この先自分もどうなるのかとこみ上げてくるものがあつた。」

九月十日 日 晴れ 今日はいよいよ那須へ出発する日だ。朝の食事は家での最後の食事であつた。本当にお母さんはいらっしゃったと思つた。九時半頃、戸田、柴田さんが送りにきてくれたので、私はお父さんとお母さんに「別れ」を告げて出た。お兄さんと英ちゃん「弟」も駅まで送りにきてくれた。上野までの景色は今度も二度と見られないだろう。

九月十八日 月 晴れ 今日こちらに来てから初めてとてもよい天気であつた。それでもまた農場へいった。吉一先生もいらっしゃつた。すぐ草取りを開始した。いままではさつま芋畠をやつて居たが、今日からその奥にある里芋畠である。どこが畠なのかわからない程草の方が沢山生えていた……。

九月廿二日 金 晴れ 第十号室は今晚の料理当番である。「今夜はライスカレーよ」と先生がにこにこおっしゃつた時、私も嬉しかつた……。(カレーライスの材料の分量が記され、肉は桜肉(馬肉) が三キロとある)。

九月廿四日 日 晴れ 今日は日曜なので楽しい計画があつた。それは健康な人達で茸栗を取りに行くことであつた。それもお弁当を持って行くと言つたのは行きつた。私はずっと遠くに行くから取り始めるのかと思つて居た。が、出発後五分もたたない内に村の中に入って取り始めた。ここらで一番上品な茸とされている「千本姫路」はめつたになかつた。食べられることは食べられるが余り味は優れて居ないという「あみのめ」は沢山あつた。次第になくなっていくので、つまらなくなってしまった……。

九月廿五日 月 晴れ 今日は南沢で父母会が開かれる。お母さんもいらしたかしら、忙しいからいらつしやらないかな等と思う。月曜なので三単位勉強があつた。一単位は阿部先生の家で国語をした。今日から手紙の間違ひを先生に見て頂く事になつた。途中、お料理をする時間になつたのでぬけて始めた。昼の献立は茸とずいきの煮つけ。大根の葉と「鮭かん」のいため物と大根の千六本、茸は昨日皆で取つてきた物だつたけれど五百グラムしかなかつた……。

十月二日 月 晴れ ……今晚、林さんの作曲した曲を放送するので久保さんの家に聞きにいった。山本、久山、森、菘生さんと私と先生だつた。那須の高原の夜道を初めて歩いた。月がうつすらと出て居たので、あたりは少し明かるかつた。久保さんの家に着くと

一番奥の四畳半に案内された。とてもあたたかかった。久しぶりでラジオの時報（九時）を聞いて東京へ帰ったようだった。又家の事が思い出された。やがて林さんの音楽が始まった。とても美しかった。聞いているうちに林さんの事が色々思い出された。

十月三日 火 晴れ……午後勤労をした後夢にも思っ居ないことがあった。それはおやつがあった事だ。梨が一つと「いり大豆」であった。

十月九日 月 晴れ一時間目、算数。二、三時間目、国語。四時間目、理科であった。午前中はこういう時間割であった。国語は力試しをするはずだったが農場から植竹さんが見え阿部先生とお話していらっしやっただので出来なかった。なぜいらしたのかといふ事を先生にお聞きしたら、農場の馬が一頭死んでしまった上、さび川があふれて大豆は大部分流され、里芋畠は男子部の人でも腰のあたりまで水がくる程大変な事になってしまったそうだ。私達はそれを聞いてがっかりしてしまった。

十月十一日 水 曇……朝食はいつも「ぞう炊」だ。お米が足りないからではない。寒いからだ。……九人の人がお医者さんの家に「おでき」を見て頂きに行った。私も出来て居たが行かなかった。「当時、足におできが出来かなか治らず私もその後、四十分余り歩いて駅の近くの医者へずい分通った。今でもそのあとが残っている」

十月十六日 月 久し振りに農場にお手伝いに行った。今、農繁期で一番忙しい時である。今まで農場で昼御飯をいただいて居たが、人数が多いので、こちらからお弁当を持って出かけた。帰りにお野菜をいただいでくるので一人一人リュックを背おって行った。今日は東那須野国民学校の生徒が百名来て居た。どちらが出来るか力比べである。……国民学校の人達は仕事を始める時全員素足となって「かま」を持って稲刈りに行った。私達は大豆畠に行った。とても水がひどかったらしくてまだじめじめして居た。

十月廿五日 ……午後は木工所へ行った。わけは薪がもうじきなくなるので、それをいただくのである。もってくるのではなく今日は、すぐ馬車に乗せられるようにせまい所から運び出すのだ。四百五十束を貰うので、それを運び出した。

十月三十一日 ……今朝の礼拝のお話は神風の事であった。神風は元寇の時に起ったものだ。先生が新聞をよんで今でも神風がある事をお話しになって下さった。と言うのは今フィリッピンの東方で激戦をして居る。又レイテ島においてもそうだ。敵は数をたのみに大編隊をくんでやってくる。それをやっつける為今までは飛行機から爆弾を落してやって居た。が、そんな事でなく一機一艦に体あたりをするのだ。その体あたりをする部隊をくっつけて神風特別攻撃隊と言うのを組しきした。その部隊は敷島とか山桜とか菊水に分れて

いる。この間、戦果をあげたのは敷島隊である。関大尉以下四名であった。十九才から廿四才までの若き海鷲だ。攻撃に行く時の事等が新聞にのって居た。大決戦となってきたのだ。どうしても勝ちぬくため子供は子供の立場で疎開生活を一生懸命やらなければならぬ。明日から十一月。寒さに負けないで元気でやろう。

「それから六ヶ月後の昭和廿年三月十日、進学のため六年は帰京する。半年振りに我が家へ帰る喜びで溢れていた。ところが、赤羽までくると汽車から全員おろされてしまった。

疎開する朝「…上野までの景色は二度と見られないだらう…」と書いていたことが的中した。髪は焼け半分なくなり、目は煙で赤くただれ全身すすけた何千人という罹災者が僅かに鍋、釜をもってうつろな表情でプラットホームに腰を下ろしていた。無気力な、疲れきった棟子で、うつろな赤い目だけを私共に向けた。こざっぱりした私共は罹災者から非難めいた視線をいっせいに受けたような複雑な心境だった。その朝、米軍三百機が無差別爆撃をし一般市民八万余人を殺し、百万人近い人が家を失ったといわれる戦争史上でも悲惨な日だった。」

足のすくむ思いで地獄図の東京の生活に一步踏み入れたのだ。

(昭和五十二年八月三十一日記)

私どもの願い

先日、高良留美子さんより電話があり、疎開していた時の文集作りを企画していただけることを知らされました。

高良さんとは初等部以来、親しくおつき合っている仲です。唯彼女は女子部普通科一年で転校され、当時の方とおつき合いが全くないとのこと、私に住所、氏名を調べてほしいと依頼されました。

高良さんと丁度二年前、一度那須へ行く計画を持って居りました。彼女はその後秋に一人で疎開地と農場へ足を運ばれました。当時の日記がたまたま私の手元にあり、彼女の資料の一部になればと提供しました。今その古ぼけた、那須の美しく紅葉した葉が色あせてしおりがわりに頁に残る日記を読みかえして見ると、当時の生活がまざまざとよみがえって来ます。高良さんもよく覚えていられるとおっしゃる九月三十日の「マッシュ、マッシュ」の出来事（多分、単えていられるでしょう、随分と騒いでいらしたのを覚えて居りますから）等には子供ながらに日記にふれて居りません。自由学園の生徒らしからぬ出来事と判断したのでしょうか。「編者注 同文集のなかに「九月三十日の（飯は平等に）」の大衆運動についてはだれかが記すだろう」（執筆 本郷淳「断片的記憶による那須疎開学級のこと（も）」という表現がある。」

昭和二十年の三月十日に私共（六年生）は帰京し、前夜の東京大空襲で焼き出された人々でござった返す赤羽のプラットホームに着いた時の驚き、初等部の卒業式は近くの人が二、三人集まり個人の家で行い、女子部に入學、家族の疎開、寮生活（入學式は空襲で一時的に断され防空壕の中で迎える）やがて敗戦。あわただしくすさまじい体験に巻き込まれ、私の記憶の中に五年生以下の人達がその後どうしていたのか、いつ迄那須にいたのか、全く今日まで知らずにいたことを発見しました。

すべては戦いが勝つまで、としいられてきた当時の事、私は自分の子供が丁度その年頃になり話してきかせて居ります。戦争だけはしたくない、そういった私共の願いを子供に伝えていく義務があると思つて居ります。

「出所：自由学園初等部 第一四回生 企画編集、『あしおと・私達の学童疎開体験 那須の記録・いま生き生きと』、一九七七年九月十日発行（非売品）」